

国際交流委員会報告



ARAHE 第6回香港会議報告

国際交流委員会

1. 第6回アジア地区家政学会議の概要

(1) 全体的意義

1991年7月17日(水)から20日(土)まで開かれた今回の会議は、第5回大会が1989年にシンガポールで開かれて以来のものである。アジアの先進国として発展する香港が開催国であり、統一テーマには変容する情報技術の発展と影響をとりあげて、「情報技術：革新への発展」ということであった。地元の香港からの84名をはじめとして、日本から約50名を含め、14カ国から総計300名が参加した。オーストラリア、イギリス、アメリカの、アジア外からの参加もあった。

会場は、香港島の市の中心地域にあるフラマホテルがあたり、参加者は行事に組まれた多彩なスケジュールの中で、友好を深めつつ、アジア地区での家政学のあり方に関心を高めることができた。

ARAHE (Asian Regional Association for Home Economics) では、韓国の李琦烈会長の努力により、機関誌 ARAHE Journal の第1号が発行され、参加者にその旨が報告された。家政学が、各国の歴史と生活の伝統をふまえ、人間らしい生活の向上を求めてゆく中で、情報技術の発展はどのように家政学の研究、家政学を学ぶ専門家養成での対応、家族や家庭生活との関係、各国との情報を通して交流などにかかわるかなど、多様な課題が関心の的であった。これらの会議や分科会の間に展示会も多彩に行われた。全体としては、日本の家政学の研究重点化の傾向よりは、生活の現実や教育のあり方への対応傾向が大きいように思われたが、コンピュータをはじめとする情報技術とのかかわりについては参加者の多くが関心をもち、教育や企業の中でどうとりあげるかなども話題となっていた。

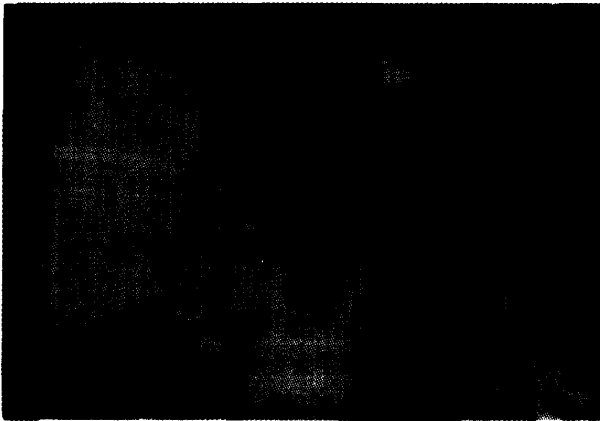
全日程の中では、第4日目の計画が事前のものとは大幅に異なり、IFHE アジア地区選出の副会長である松島千代野氏のスピーチがなくなり、パネル形式の報告会に変更となり、その中にポスター形式で報告予定の日本家政学会の活動状況報告が加えられていたりして戸惑いが

あった。しかし香港家政学会を中心とする会議実行委員会の努力で、盛会裡に参加できたことは有益であった。以下主な行事についてそれぞれの担当者の方から報告されるが、日程表と関連させてお読みいただきたい。

さらに次の第7回 ARAHE 会議は、1993年にマレーシアのクアラルンプールで開催されることが決った。

(2) 日 程 於 香港 Furama ホテル

時 刻	行 事
第1日 7月17日(水)	
9:00~	会議前第1回評議員会 (ARAHE 評議員出席) 於・香港 警察クラブ
12:00	昼 食
3:30~	参加者登録 ・ティーレセプション ・AV による香港や教育についての提示
4:30~	会議のオーバービュー ・ARAHE 会議の概要 会議実行委員長 ・評議員の紹介 ARAHE 会長 ・IFHE の紹介 IFHE 代表者 ・日程説明 会議実行委員長
6:00~	歓迎カクテルパーティ (香港銀行ビル)
8:00	自由時間
第2日 7月18日(木)	
9:00~	開会式 ・祝辞 香港教育局代表 ・歓迎の辞 ARAHE 会長 ・開会の辞 香港家政学会長 ・海外からの参加者紹介 実行委員会国際連絡委員
10:15	休 憩
11:00~	全体会議 (I) 講演「情報技術と家政学」 Mrs. Dodie Hodgkinson
12:00	歓迎昼食会 (ファッションショウを含む)
1:45~	関連機関の見学ツアー
6:30	自由 (希望者は港湾クルーズ)



写真A. 日本家政学会の展示

第3日 7月19日(金)

- 9:00～ 分科会(1)
- 10:15 休憩(展示:10:15 a.m.～3:00 p.m.)
- 10:45～ 分科会(2)
- 12:00 昼食(各自)
- 1:30～ 関連機関の見学ツアー
- (4:30)～ 第2回評議委員会(ARAHE 評議委員出席)
- 6:00～ ポスターセッションと展示
- 7:00 ナイトディナー(文化交流の夕)

第4日 7月20日(木)

- 9:00～ 全体会議(Ⅱ)
講演「情報技術と香港の家庭」
Mrs. Camie Young
- 10:00 休憩
- 10:30～ 国際パネルプレゼンテーション
司会 Dr. Rosan Kao
パネリスト
Dr. A. G. Corpuz (フィリピン)

Ms. Biba B. S. Gian

(シンガポール)

Mr. Tosi Heung Sang (香港)

Mrs. Betty M. Versteeg

(ハワイ)

11:30～ 閉会式

・評議委員会報告

・参加証贈呈

12:30 お別れ昼食会

(藤枝恵子)

2. 開会式 (Opening Ceremony)

開会式 (July 18, 1991, 9:15～10:00)

開会式は午前9時15分から10時まで、全体会議場 (Jade Room, Hotel Furama) で香港教育機関の多くの関係者(来賓)の出席を得て盛大に行われた。

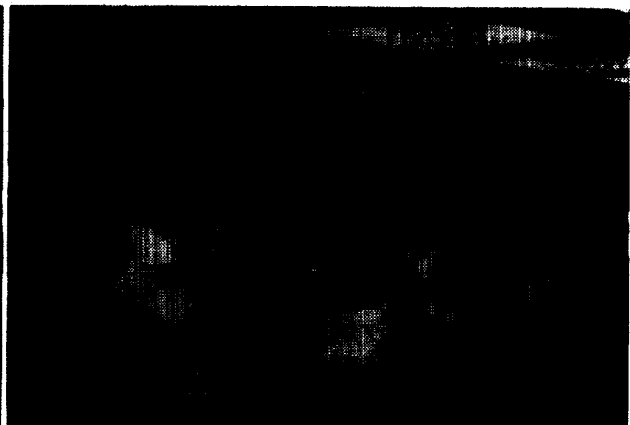
まず、香港教育局長の Y. T. Li 氏によって第6回 ARAHE 会議の開会宣言がなされた。氏はその中で香港における情報技術が各種の産業や日常生活に組み込まれていることを紹介し、こうした情報時代に各国の家政学者が集まって情報技術の多様な応用方法等について討論することの意味深いことを述べ、今回のテーマが時期を得たものであると高く評価された。

次いでアジア家政学会会長 (President of ARAHE) Dr. Ki Yull Lee から歓迎の挨拶をいただいた。

Dr. Ki Yull Lee 氏は、テーマ「情報技術、変革のための展開」はアジア地区のこれからの新たな役割を指摘するもので、産業社会から徐々に情報化社会に移っている中で家政学者もその歩みに合わせて変っていかねばならないが、同時にその変化や人類に及ぼす影響についても十分に検討する必要があるとまず述べられた。次いで、学問研究は本来、保守的であるが、文化の保存と



写真B. 開会式。壇上に並んだ実行委員会委員



写真C. 来賓、参加者でいっぱいの全体会議場

国際交流委員会報告

繁栄をその役割ともしていることから学術は社会的な企業としての貢献もあるので、家政学においても発展成長していく社会に対応していくエネルギーが必要であることを強調された。

また、ARAHE の発会式が1983年日本で行われて以来、ノルウェー、ソウル、バンコック、シンガポール等での会議の積み重ねを経て第6回目の香港会議に至ったこと、また ARAHE ジャーナルの発刊ができたこと、ARAHE が今後のアジア地域の発展のためよりよい英知を生み出して共に活動すること等の重要性を説かれ、そのために今回の会議が ARAHE や IFHE の新たな団結と専門家として成長する好機でもあることを述べられた。

ARAHE 会長の歓迎の挨拶に引き続いて、香港家政学会会長・ARAHE 実行委員長、Miss Nancy S. P. Yiu による主催者国としてのスピーチが行われた。

はじめにこの ARAHE 香港会議が ARAHE を中心に香港教員センター、香港家政学会の協力を得て開催できたことを紹介し、各組織の概要を述べられた。ARAHE については周知であるので省略するが、Miss Nancy のスピーチによると香港教員センターは数年前に創立、幼稚園、小学校、中学校の先生方に教員としての専門的な能力を促進させるための援助活動や教材・資料の提供サービスをしている。

また、家庭科教師のための研修コースをこのセンターと共同で運営しているとのことである。

一方、今回の会議運営の母体となった香港家政学会は正式には1986年に発足、6年目を迎えて会員数も200名に達しているが、イギリス、オーストリア、カナダ、アメリカで教育を受けた方々も含まれているとのことである。

Miss Nancy はスピーチの核心の部分で、会議のテーマに触れ、この個性的なテーマが設定されたのは、これまでのように家政学が調理や裁縫といった実地技能に熟中していたのでは、社会変化に取り残されるアウトサイダーになってしまう。今こそ機敏に対応していこうとする家政学者の専門的な方法を学ぶ機会とするために設けたものであることを強調された。また家政学者は急速な情報技術の発展に伴って広範囲に家庭や社会に変化が起こって来るとき、それへの対応のための専門知識と反論のための専門能力を組織的に持つ必要があり、今回の会議がそれ等の能力を我々に約束すると共に、家政教育における情報技術教育の確立が望まれていると、スピーチを結ばれた。

最終に Dr. Rosann Santora Kao (IFHE 地区委員、ARAHE 実行委員) によって海外情況の概要報告が、また実行委員会からの記念品の紹介等があり閉会した。
(内藤道子)

3. 本 会 議

(1) 講演：情報技術と家政学 Mrs. D. Hodgkinson

18日午前、開会にまつわる諸行事が終わって、11時から、本会議(1)がホテル「翡翠の間」で始まった。スピーカーは、英国のバッキンガムシャー州議会教育部の情報技術アドバイザー、Mrs. Dodie Hodgkinson で、演題は「情報技術と家政学」(Information Technology <=IT> and Home Economics)であった。この講演は、翌日の本会議(2)での、香港の Mrs. Camie Young の報告と共に、会議のメインテーマ「情報技術」の基調講演の性格を持つものであった。99年間にわたった英国による租借(1997年迄)という、香港と英国との特別の政治的歴史的関係からか、今回の香港での ARAHE 会議には英国系の人々の活躍も目だったが、英国本国から招かれた女性がこの講演を担当したこともその表れであろう。

ホジキンソン氏の講演は、スライドの説明を中心として進められ、配布されたのは簡単なレジメだけであった。氏によれば、報告の目的は、IT がいかんにして 'Home Economics' とテクノロジーの統合を支援できるかを示すことであった。その方法として、氏は技術についての英国の "National Curriculum" を用いた。氏のスライドは、IT が、以下4つの到達目標にわたって、家庭、学校、レクリエーション、コミュニティ、企業や工場の場で、設計と技術能力開発のために、'pupil' にいかに用いられるかを示すために用意された。

4つの到達目標とは、(1)は、ニーズと機会を関係づけることであり、IT は、興味を生み出し、情報を収集し、情報やアイデアを照合し、記録するために用いることができる。(2)は、設計を案出する事であり、そのために、IT は、生徒達に仮説をたて、推測し、比較し、設計案を出すために用いられる。(3)は、計画と作成であり、そこでは IT は、設計すること、情報を伝達するために用いられる。(4)は、評価であり、IT は、活動や、結果を評価し、結果を伝達するために用いることができる。

スライドによる例示は、食物、住居、日用品、子供の発達、及び、被服、繊維、消費者問題の領域から作成されていた。デザインにおいても、陶器・皿の模様、衣服

のデザインと模様、台所のレイアウト、子供の本のデザイン等、興味をそそるソフトが、スライドの画面に次々と現れた。演題に 'Home Economics' とあっても、例示の内容の対象が、'pupil' であったことから、家政学というより家庭科教育と IT の関係を中心に論じたとの感が強い。また、英国の例だけでなく、開発途上国の多い ARAHE で IT 問題をとりあげる際の留意点も、この基調講演に含まれていてほしかったとの感想を持った。
(伊藤セツ)

(2) 講演：情報技術と香港の家庭

セッション II (7月20日, 9時~10時, Jade Room, Hotel Frama) では、ホンコン教育通信技術協会の Camie Young 氏により「情報技術と香港の家庭」というタイトルで報告がなされた。報告の要約は以下の通りである。

過去 20 年~30 年で我々の社会は新しい時代に入った。国により、新しく生まれ、用いられ、コントロールされる情報は様々であっても、我々は今真に情報革命の時代にあるのだということが認識できる。

情報技術における重要な進歩といえば、電話会議やビデオテキスト、電子メール、データベースマネジメント、コンピュータネットワークシステムといったことが思い起こされる。そして、それらは一見我々の家庭生活とはほど遠いもののよう一般には思われている。

しかしながら、これらの情報技術は香港の家庭とかわりの強いものであり、この報告では香港の家庭で我々が実際にどう情報技術を用いているのかについて概観していくことで、情報技術の応用や有効性、将来性についてみていくことにしたい。

近年、エレクトロニクス製品の消費者の範囲が拡大し、デジタルの IT 装置が多くの家庭の情報と通信システムに用いられるようになった。さらに通信とその応用の目的で異なった機能や設備の統合が可能となった。

ホームオートメーション (伝統的テレビ、ラジオ、電話、電報、テレックスなどを含む) はコンパクトディスクや高品位テレビ、レーザーディスク、ファックスなどを発達させた。こういった発達には、我々の生活についてみれば、娯楽の領域ばかりでなく、教育の領域および、情報の領域に関しても人々の生活のあり方を大きく変えたのである。

たとえばテレビにおいては、香港では多重放送がなされており、希望すればテレビを経由してコンピュータ・データベースとのアクセスも可能となっている。今日テ

レビは家庭の中において、従来の娯楽としての役割から、視聴者へ世界的規模での情報や知識伝達の役割へと発展してきている。

またテレフォンネットワークは音声通信とデータ通信に分けられるが、現在データ通信領域の利用も各家庭に広がっている。

しかし一方で我々は、このような情報革命によって、コンピュータ犯罪や高度技術のもたらす社会問題の解決に直面しており、それによってその解決方法も学んでいるのだといえる。
(細江容子)

(3) 国際パネルプレゼンテーション

最終日の 10 時 30 分からは、以下 4 研究が報告された。

最初の研究は「Balik—Paaralan Program (B. P. P.) による学校から離れた所で行われる教育 (フィリピン)」で、学校での一般的教育と非公式な教育間に橋をかけることをめざし、B. P. P. と呼ばれる一定のプログラムに従って実践されているものである。この教育プログラムの主な目的は、a) 学校に行っていない青少年や成人に、フィリピン教育庁が中学課程の資格認定をする。b) 勤労青少年、成人、主婦あるいは長期療養中の人に、各人の環境のもとで中学課程の資格認定の機会を与える。c) 現在学校教育を受けている人でも、自己学習モジュールや自己レベルに応じ、好きな場所、好きな時間に学ぶことができるようにする。d) 家庭や社会で役立つ専門的な職業技術を持たせる。e) 学校不適応児に対して学校に戻る手助けをする等であり、今後このシステムの効果が一層期待されている。

次の「家政学への情報技術の活用—Hospitality Management からの視点 (香港)」では、今後のポストサービス社会 (産業) への移行を意識して、レジャーと人間形成の関わりに寄与する家政学の新しい分野に、情報技術が活用されているという報告がなされた。この研究における Hospitality とは病院や福祉施設での介護関係を意味するものではなく、例えばホテル等において最適な人間・自然環境を考慮した経営をめざし、情報技術を縦横に駆使して、総合的な教育目的を持ったものとしてとらえられている。

三番目の「Catering Services (料理やサービス等を調達する) における情報技術の活用 (香港)」では、献立計画や分析、在庫や購売の調整、生産調整、食品価格や売買調整さらに労働生産性や作業員名簿に至るまで情報技術を活用していることが報告された。これら情報技術活用のレベルとして、情報の受け入れからネットワーク

国際交流委員会報告

の統合まで段階に系統化されている。

最後の「家政学における倫理—情報技術に関わる基本的な考え方—(マレーシア)」の研究では、家政学研究における情報技術活用の倫理的側面として、従来家政学の研究では動物実験、解剖等が多く行われてきたが、情報技術のうち特にシミュレーション能力を活用することにより、生物の犠牲が少なくなった旨の報告がなされた。

これらの研究はいずれも家政学の種々の分野で情報技術が多目的に活用され、今後のあるべき方向を探究した興味深い内容のものであり、質疑応答も活発に行われた。(佐藤文子)

4. 分科会

分科会第一室 (Pearl Room 3)

前半は藤枝先生が座長で、まざインドの Prof. Ratna Sahu は“文化と開発の中におけるコミュニケーション”と題して次のような発表をされた。

コミュニケーションは社会的、経済的な発展が進められる上で触媒的な働きをするが、後進国にとっては経済的価値観のもとでコミュニケーションが利用されてはならない。

情報科学は土着の価値観や伝統的生活スタイルを変化させるものではなく、新しい物と古い物が共存するための接点となる道具とされるべきであろう。土着の文化を大切にしたい情報科学を広めるためには、人々の言葉や人間関係にチャンネルを合せることであろう。

次にイギリスの Ms. Loraine Ashton は“情報科学システムの設置にあたって、職場の状況に応じた必要条件”と題して次のような発表をされた。

新しい設備の設置やハード部分の取り替えにあたっては十分に時間をかけて考え、またその職場の関係者とも

良く相談する必要がある。必要性のない物を求めたり、手近かにある資源を利用することなく最新科学に突進することは避けたい。すでに情報科学はタイプライターや計算機に取って代った。今後は未来のために長い、広い範囲でのプランが必要である。

後半は Ms. Rita Fernando が座長で、先ず香港の Mr. Tsoi Heung Sang が“家政学者達が情報科学について討議する場合に考えられる Topic の分野”と題して次のような発表をされた。

情報科学を実践の面、理論の面からとらえると、実践の面では多くの人々に良く知られているが、理論の面に関してはまだまだ理解されるに至っていない。トピックとしては第一に家政学分野と情報科学の接点を広め、情報科学の今後の発展のためにどう貢献すべきか。第2には情報科学がカリキュラムに与える影響。第3には教育上にもたらす情報科学の影響、等が考えられる。

最後にアメリカ合衆国の Dr. Ellen P. Pusey は“情報科学と家庭的共同体を旨とする指導者達”と題して次のような発表をされた。

1986年以來メリーランド州では家庭的共同体を旨とする指導者を教育している。このことは今や合衆国中に紹介され成功を収めている。この中で家政学者、有志の人達興味ある人達に情報科学の利用法を集中的に訓練した。その結果、指導者達は実際に活躍の場においてこれらを利用することにより、より一層の効果を得ている。

(米田泰子)

分科会第二室 (Pearl Room 2)

参加者：約 50 名

司会：ハサ・ナワウィ氏、記録ニコラ・ビッケン氏

「中華人民共和国における家政教育の現状と将来の発展」リー・フー・テン氏、中国家政学会会長、台湾

家政は女性の美德、能力、家事技術を高めるために発展し、1907年学校教育に組込まれた。近年は中学から大学まで各種レベルがあり、技術と理論を共に重視し、学校から地域まで広げて家庭生活の重要性を教育している。

台湾の家政教育で今後重要なことは、3年制大学から4年制への移行、科学技術大学の設立、専門教育と高齢者福祉、教育方法と教材の改良、調査・教材資料センターの設置、外国との互換プログラムの確立であろう。

「織物デザインのためのアパレル教育」小口 登氏、日本女子大学、日本

本研究では型紙に曲線を描く基礎的な2つの式を示す。



写真D. エキジビションの会場

$$(X/A)^p + (Y/B)^p \quad 0 \leq X \leq A, 0 \leq Y \leq B$$

$$Y = B \cdot (X/A)^n \quad 0 < p < \infty, 0 < n < \infty$$

AとBは等式で規定される長方形の2辺の長さ、 p と n は変数。 p と n を変えるだけでコンピュータで簡単に型紙が描け、科学的な図形教育も行える。それら様々な形の幾何学模様がスライドで映写され、会場から「興味深いので私のところで講演を」という申出もあった。

司会：ジュリアナ・フン氏、記録：前掲

「韓国の家政学分野における情報科学技術の応用」
スー・ジェイ・ムーン氏、ヨンセイ大学、ジン・ソーク
ジョ氏、イウァ女子大学、韓国

情報化に対応する韓国の家政学者の研究方向は4つある。第1は、家庭生活の変化への対処の仕方。第2は、調査や教育のデータベースと、統計分析の手段として利用。第3は、家政学者の専門的知識と情報科学技術を絡めたソフト・ウェアの開発。第4は、家庭生活や他の領域への有益で専門的な貢献である。今後は心、感情、道徳、幸福に関する家族福祉のための科学技術の活用を考えることが韓国家政学者の役割りである。

「情報科学技術と衣料」ゲイル・タイラー氏、香港工芸、織物、衣料協会、香港

情報科学技術について、それへの対応、香港での採用、技術のズレ、今後の進歩への提言を次のように述べた。

衣料業界は情報科学技術の利点を十分利用していない。香港の企業は給料計算、在庫管理などに採用し、一流企業は経営方針や能率増進のデータベースの開発に努めている。開発された科学技術と企業の適用能力には様々なズレがある。今後は情報科学技術を通して地方産業における管理、生産、販売などの組織的改善をすべきだろう。

(大野庸子)

分科会第三室 (Jade Room)

この会場では、英国家庭科教師連合会長による「英国に於ける1988年の教育改革によるTechnology(以下技術と訳)の義務教育レベルへの導入を、家庭科教師がどのように取り組んだか」という報告と、香港のMr. Chris, T. H. Smithによるデータベースと電子通信による情報収集、検索方法の説明および実演が行われた。

会場には、前部左手にコンピュータが、右側に大型スクリーンが用意されていた。まずChairのDr. B. Maidment挨拶、演者の紹介が行われ、Mrs. June Scarborough氏が講演した。内容は、英国におけるEducation Reform Act(1988)により5歳～16歳の全ての児童が、英語、数学、科学および技術、歴史、地理、

現代国語、美術、音楽、体育を学習することとなったが、技術はこれまでのカリキュラムにない唯一の新しい科目で、5つの分野、美術デザイン、職業学習、クラフトデザイン技術、コンピュータ学習、家庭科が関連する領域として位置付けられた。児童が身につけるべき技術の構成要素は、デザイン技術と情報処理能力である。家庭科教師は、関連領域の教師とともにチームを作り、実際の生産工場や市場を調べ、児童の情報技術を育てる教材および教育方法の開発に取り組んでいる。即ち食物と織物を題材に、マーケットリサーチ、パッチ生産、原価計算、商品普及、生産ラインのコンピュータ制御など、具体的に実社会でコンピュータがどのように用いられ機能しているかを理解させる教材を作成し、成果を上げている。1988年当初は、家庭科の存続さえ危ぶまれたが、こうした努力により家庭科の価値が認められ、家庭科教師は技術のグループリダーとして、誇りを持って活躍しているとのことであった。

続いてMr. Chris T. H. Smithによる「データベースと電子通信による情報検索の方法」の説明と実演が行われた。コンピュータと電話回線、ビデオデッキなどとの接続、キーボード、マウスの扱い、コンピューター用語window, menu-pointerなどの説明の後、データベースによる情報の検索が大型スクリーンに画面を映して実演された。Health DATAを用い子供のかかりやすい病気に関する情報の検索が行われた。コーヒープレイクの後、ロンドンの情報センター、香港の情報センターとそれぞれアクセスして情報の収集が行われ、当日の空港の利用状況などが、数分のうちにスクリーンに映し出された。

このセッションの参加者約30名は、皆熱心に教材のVTRや実演に見入っていた。アジア地区のメンバーにとって有意義な興味深い内容であった。

(成瀬明子)

5. ワークショップ

参加例 (1) Hong Kong Housing Authorityの見学に参加して

今回のARAHE会議では、18, 19日の両日午後にEducational/Industrial Site Visitsが準備された。リストアップされた訪問先は、Computer Education CenterやDepartment of Hospitality Management, H. K. Polytechnic等の9カ所、加えてexploring Hong Kong independentlyという項目もあり、香港の現状を実際に見て理解してほしいという主催者側の意向が感じられ

国際交流委員会報告

るものであった。私はその中から、Hong Kong Housing Authority (香港房屋委員会) を 19 日の訪問先に決め、予め日本から申し込みをしておいた。

当日は大へん日差しが強く日本よりもだいぶ蒸し暑いような気候であったが、用意された double decker のバスは快適で、クーラーは効き過ぎるくらいであった。ARAHE 会場の富麗華酒店のある香港島から海底トンネルを抜け対岸の九龍に入り、バスは啓徳空港脇を通りさらに進んで行った。車窓からの香港の街の眺めは、素晴らしいモダンな高層ビルが林立する一方で、今にも崩れそうなベランダや錆び付いた貯水タンクが壁面にむき出しとなっている老朽化したアパートが立ち並ぶといった、新旧が混在した独特の景観であった。繁華街を抜けやがてバスは、中高層のアパートが立ち並ぶ住宅地域に入って行った。日本で言うなら団地の中に入って行ったという感じであった。その一角に Hong Kong Housing Authority の建物があった。12 階建てくらいの真新しい建物は、1990 年に落成したばかりであった。入口の警備は厳しいように見えたが、私たちは HKHEA の一行ということで、すぐに上階の資料展示室へと案内された。ここでは public housing や Hong Kong Housing Authority の発展経緯や今後の宅地開発計画、public housing の模型や平面図等の資料がわかりやすく展示され、若い男性係官から説明を受けた。さらに 10 分程度の film が上映され、香港の住宅事情について一層理解を深められた。

香港では 1953 年のクリスマスの晩に九龍の石硤尾地区で大火が発生し、53,000 人もの人々が一夜にしてホームレスとなった。政府は被災者に対し迅速に新しい住宅を与えるための方策として public housing programme を開始し、翌 1954 年には緊急措置として初めて大規模な public housing を建設した。現在、香港の人口の約半数にあたる 296 万の人々が public housing に居住している。今日見事に発展してきた香港の public housing は、このような大火による大量の住宅焼失とその被災者の救済という一つの契機があったことを、今回の見学によって知ることができた。

次に、引続き New Town に案内していただけるというので、大へん期待してバスに乗り込んだ。目的地に向かう間にも次々に現れる超高層住宅ビルや解体がすすむ老朽化住宅のコントラストは大へん印象深く、さらにしばらく山岳地帯を走ると急に視界が開け、忽然と超高層ビル群が現れた。到着地は現在開発中の地域の一つ新界だったと思われる。私たちはある超高層住宅の中に入り、

そこに開設されている事務所に立ち寄り再び説明を受けた。最後に、この 40 階建て住宅の屋上に案内され、開発地域を一望した時は圧巻でその規模の大きさはただただ驚くばかりであった。地震がない国とはいえ、災害時の安全対策や設備はどうなのか、子どもや老人への配慮はどうか等々の疑問に対しては、十分考慮された設計であり問題はないということであった。今回は居住者に直接話を聞いたり住宅内部までの見学は行えず残念であったが、地域内のスーパーマーケットやファーストフードショップでの人々の様子は、日本のそれを思い出させるものであった。香港の現在の住宅課題として、九龍域に代表されるスラム化・老朽化した住宅の掃と再開発の問題や水上生活者の問題があるという。6 年後の返還を目前にした香港が、今後どのように変化していくのか、特に住宅政策の展開について興味深く、さらに注目していきたい。最後にこのように有意義な企画を準備してくださった HKHEA に感謝申し上げたい。(瀬沼頼子)

参加例 (2) China Light and Power Company Limited の見学に参加して

7 月 18 日、開会式と本会議のプログラムの後、うつとりするようなファッションショーを見ながらの昼食会がもたれ、その午後は、香港の教育・研究・産業のハイライト的機関・企業を見学するワークショップが企画されていた。コンピュータ教育センター、織物・被服研究所、電話会社、電力会社、ガス会社等 7 つのグループに分かれて希望者を募っていた。これまでの ARAHE 会議で、会場を離れてのこのようなワークショップが会期中にもたれたのははじめてではないだろうか。

香港の夜景の美しさは東洋一と聞いている。実際に Victoria Peak の山頂に立って、ダイヤモンドをちりばめたような美しい香港島や九龍の夜景を眺めると、この電力はどのようにして供給されているのだろうか！と興味をもつ。

そこで私は中華電力についての見学グループに入り、青山発電廠を訪れた。Hotel Furama からバスに乗り、海底隧道を通過して、九龍へ渡り、途中渋滞にも会い、約 1 時間半かかって目的地の Castle Peak Power Station Training and Information Center に到着した。

ここは Discovering the Wonders of electricity の展示場があり、甚だ電？(What is electricity?)からはじまり、電の原始模式 (Early forms of electricity) があり、次に物質の構造、電力発展に重大、電在社会中的用途、電源、発電用の電源、可用作発的各種能量、



写真E. Castle Peak Power Station Training and Information Center にて, "Discovering the wonders of electricity"

核能, 発電系統, 環境保護, 安全教育及訓練, 中華電力及埃克森の歴史に至る迄, 模型を使い, 図解を加えて説明してあった(写真参照)。

「なまず」の写真もあり, そこには The ray—an example of electric fishes. 電虹——一種放電的魚とあったのも印象的であった。

香港には発電所が3カ所あり, それらは青山発電廠, 青衣発電廠, 鶴園発電廠である。これらの中華電力は, すべて石炭で火力発電を行っている。また, この石炭は中国, U. S. A., オーストラリアから輸入していた。

許容電量は受容電量より多く, まだ余裕のあることがわかり, 高層ビルが街にはどんどん建設中であつたが, また更に美しい夜景の風光が展望できることであろう。

展示場の前には発電所があり, そこも見学することができた。建物の中は, ガラス張りにしてあり, 発電している様子が見学できるようになっていた, また, ガラスの中の室温が掲示してあった(40℃)。ガラスに触れてみると高温であった。

部屋の隅には消火器があり, そこには滅火喉(Hose Reel)とあった。

玄関で参加者全員の写真を撮り, 香港島へと帰路についた。

他のグループも, それぞれ, 有益で, よい経験をしたようである。この企画は, 翌日にも行われたが, 単に目的地的見学ばかりでなく, 往復のバスの中での香港の家政学者の説明によって香港そのものを理解することにも役立ち, 好評であった。(兼信英子)

6. 評議員会報告

アジア地区家政学会評議委員会は, 会議に先立つ7月

17日9時から12時に第一回目が, また19日16時30分から18時に第二回目が開催された。

加盟15カ国のうち13カ国の代表が出席した。第一回目の会議には, 日本からは藤枝恵子氏(ARAHE Committee Member), 宮本みち子(家政学会代表), 佐藤文子(横浜国大家政教育学会代表), が出席した。また大谷陽子, 松岡明子, 内藤道子, 金子佳代子の4氏が, オブザーバーとして出席した。なお, IFHEのアジア地区担当副会長の松島千代野氏, 及び家政学会代表の伊藤セツ氏は, 第二回目の会議から出席した。

(1) 7月17日の委員会の概要

役員会から, 第5回シンガポールでの評議会議事録, その後の活動報告, および会計報告があり, いくつかの質疑応答のあと承認された。会議の要点をまとめると, つぎの通りである。1) 1990年8月20日から22日に, ソウルで13カ国が参加して, 家政学の文化的側面と題する国際シンポジウムを開催し成功裡に終わった。それはこのほど出版された Journal of ARAHE Vol. 1 に収録されている。2) Journal of ARAHE の Vol. 1 が発行された。この仕事は Lee 会長はじめ韓国家政学会の担当者の大変な尽力によって完成したものである。投稿は韓国と日本に限られてしまったので, 次号からは, 各国最低一編を投稿して欲しい。また今後の編集は, 各国一名からなる編集委員会を作り, 各委員は国内の投稿論文の選定・編集を責任を持ってやることが決められた。第2号の編集までは韓国が引き受けることになった。その原稿の最終締切は, 1992年1月末である。3) ARAHE の活動を充実させるために, 各国で会員を拡大し, 財政基盤を整える必要があることが確認された。また特に日本などで努力して欲しいとの要請があった。さらに, メンバースhipカードが完成したことが報告された。4) ARAHE としての共同研究を推進することが必要な時期にある。そのテーマ, 財源, 人などについて各国で検討をして欲しい。すでに FAO の助成金などの可能性もあるのでそれも含めて, 年内に役員会の中で検討をした上で, 各国へ通知されるので, それをもとに各国で検討作業を開始することになった。5) 1993年の第7回 ARAHE 会議は, マレーシアで開催することになった。

第一回評議会後役員選挙が行われ, 次期役員は次のように決定した。任期は1992年7月から1996年7月までである。

会長 Murunalini Devi Puar (インド), 副会長 Rosann Kao (ホンコン), 書記 Hapsah Nawawi (マレーシア), 書記補 Ampari Rigor (フィリピン), 会計 Tng

国際交流委員会報告

Tsai Tin (シンガポール), 渉外A. Chareonchai (タイ) となった。なお会計監査は、日本と韓国から各1名を出すように要請された。

次に、松島千代野 IFHE アジア地区担当副会長から報告があった。その要点は次の通りである。

1) 1992年にハノーバーで IFHE 世界大会が開催される。参加者の第一次登録は、本年8月末なので、多数の参加を期待する。なお、世界大会期間中、IFHE Executive committee のメンバーの選挙があるが、その際アジア地区からタイの A. Chareonchai を推薦することが提案された(1996年の IFHE 世界大会はタイが予定されている)。

2) 1994年の国際家族年にむけて IFHE として取り組むことが決定している。各国で方針をたて取り組んで欲しい。なお、国連の NGO 家族に関する委員会から、IFHE に対して、取組みの要請と「効果的な国際家族年1994の活動のチェックリスト」が送られてきているので、それを活用して欲しい。

私は今回初めて評議会に家政学会の代表という資格で出席したが、国際学会における代表の位置付けについて、もう少し検討が必要であることを痛感した。他の国々の代表を見るかぎり、加盟団体の長に匹敵する人が代表者になっており、しかもかなり長期に亘って国際学会の任務に当たっている。それには理由のあることであり、わが国の場合にも、加盟団体(家政学会、家庭科教育学会など)のトップ役員クラスが国際交流の任務を担当する体制をきちんとつくらないと、国際関係の仕事は出来ないのではないかという思いを強く持った次第である。とくにアジア地区におけるわが国への期待は大であり、その意味でも国際的な責任を果たさなければならない立場におかれている。これまで松島千代野氏をはじめ、藤枝恵子氏などの尽力で国際関係を作ってきた訳であるが、そのあとを引き継ぐ体制作りが急務であると思われる。差し当たり年内に、Executive Member の一人として、会計監査を選出しなければならないわけであるが、日本代表でもあるわけであるから、学会として十分に検討することを要望したい。(宮本みち子)

7. 再見中国—ポストカンファレンスツアー参加記

7月20日朝、目覚めると“South China Morning Post”の天気予報に目を通した。前日上陸が危ぶまれていた台風8号は、夜間のうちに通過したとのこと。

ARAHE 会議終了後、ポストカンファレンスツアーの参加者21名は、九龍駅へ行き、14時25分発の急行列車で広州市へ向った。

広州市のある広東省は、中国最南端の省で亜熱帯の気候に属し、「食は広州にあり」といわれ、中国最大の果物の生産地としても有名である。21日は市内見学で、始めに朝の市場を訪れた。ありとあらゆる部分の豚肉、牛肉、生きている鶏、跳ねて跳びだすカエルや魚、さまざまな野菜、乾物、花などを売る店や荷車が、通りの左右に所狭しと並んでいた。市場へ通じる道路では、自転車に乗った人々がひきもきらず流れていく。その自転車を制するように鳴る車のクラクション—エネルギーな朝の光景であった。次に、明の時代に建造された「陳氏書院」、孫文を記念して1931年に完成した「中山記念堂」を見学し、「鎮海樓」では、アヘン戦争の名残の大砲が置かれているのを見、中国の歴史の重みを感じながら、朝の市場の活気を想起し、「今」この時代の中国の人々の日常生活にもっと触れてみたいと思った。21日のすべての見学を終えたのち、次の目的地である中国南部の辺境地域に位置する広西壮族自治区桂林市へと、空路約1時間かけて移動した。

桂林は、「桂林の山水は天下の第一、陽朔の風光は桂林の第一」と謳われ、その自然の美しさを誇る地域である。22日は、桂林市内を二分にして流れる漓江の川下りを行ったが、周囲の景色の美しさとともに忘れられない光景を目にした。我々を乗せた遊覧船が出航してまもなく、それまで川に漂っていた筏が近づいてきたのである。乗っているのは2人の青年で、彼らは遊覧船のデッキに飛びつき、しがみついて必死の形相で「千円、千円」と叫びながら、水墨画の描かれた扇やレース編みのカバー、果物などを我々に売ろうとしていた。桂林では国家公務員の平均的な月收入は約200元、日本円にして約6,000円である。彼らにとっての千円札1枚の価値を思うと同時に、日本での生活を省みずにはおれなかった。

桂林ではこの他に鐘乳洞や公園を回り、23日には市の中心地を歩いてみる機会を得、垣間見た人々の生活は、ARAHE の今回のテーマであった Information Technology とは程遠いものであると実感した。今後中国はどのような形で Information Technology を取り入れ、発展していくのだろうか。そのために、家政学の見地から何が出来るのだろうか。大きな課題を抱えて帰途についた。(堀内かおる)